

地域の子供達を守る

南千住母の会



「震災孤児達への炊き出しが、

母の会のはじまりです」

南千住母の会は戦後混乱期の昭和23年に発足して60年になります。南千住4つの町会から成り立ち、社団法人東京母の会連合会に属し、会員数は200人余です。会員の方の自主的な協力により、母親の立場から広く社会公共の福祉に貢献しているボランティア団体です。

「子供達と関わっていたい」

会員の大半は子育てが終わった60歳以上の方達です。時代の流れで共稼ぎの家庭が増えて、子育て中のお母さんが参加できない代わりに地域の子供達を守っています。カラオケボックスやコンビニを廻って有害図書の排除の願いしたり、お祭りや盆踊り大会には夜廻りをする事で少しでも軽犯罪の抑止力になればと活動しています。交通安全週間には、7時40分から通学路に立ったり、警察署と共に子供達を少年非行や犯罪から守るために地道に動いております。また、小学校の入学式にノートを年会費千円の中からプレゼントされています。

「子供達に楽しんでもらいたい」

年一回、開催している子ども会は、南千住警察の協力を得て荒川スポーツセンターで子供達に水泳教室やバーベキュー大会を開催して親子参加のイベントもしております。

「参加することで地域がわかる」

地域で子育て支援する「社会を明るくする運動」「荒川区青少年対策地区委員会」等や警察関係の方達との交流の中から情報を取り入れられると共に顔見知りができ生活に潤いができたと会長の石塚愛子さんは仰っています。

『私たちはこの世では大きいことではありません。小さなことを大きな愛でするだけです』

マザー・テレサ

今、刑法犯の検挙人員は4年連続で減少している一方で、実母殺害などの凶悪事件が起きています。社会不安のバロメーターとも言われている少年非行の戦後非行のピークは三つあります。第一のピークは震災による荒廃と占領の時代の1951年、第二は1964年の高度成長期、そして低成長期に入った1983年をピークとする第三から、最近の第四までと続いてきます。最近の非行の傾向は低年齢化し、中流化（両親も健在、家庭としてごく普通以上の生活をしているような



子供）にもみられるといえます。非行の傾向の変化と共に少年非行に対する大人の対応も変化してきています。少年非行等に関する世論調査（平成17年1月調査）では少年を非行に走らせないようにするために、地域社会の住民はどのように対応するのがよいかの問いに「よその家庭の子どもであっても悪いことをしたときは叱る」「近所付き合いをし、家族同士の交流をする」「日頃から地域の少年に声を掛ける」を挙げた割合が高くなっていました。

『愛のメッセージを聞いてほしければ、それを送らなくてはならない。ランプの火を燃やし続けるには、油を絶やさぬことだ』



マザー・テレサ

『愛情は、その人を抱きかかえることではない。むしろ、庭に咲く繊細な花のように、すくすくと育つように大切に育てるものなのです』トム・ラスク

200人の母の活動が縁の下となり地域の子供達を守り続けて育んで行っています。手弁当をモットーに、全て手作りのシステムで、心の豊かさや自己研鑽を糧に地道ながらも地域に根ざした活発な活動を展開している南千住母の会です。地域の子育てにご一緒に参加しませんか。ランプの火を燃やし続ける慈しみの気持ちで。